

# 博物館 Dictionary No.203

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

とくしゅうてんじ ごしょぶんか きんせい ゆうしよくけんきゅう てんじ  
 特集展示「御所文化を受け継ぐ—近世・近代の有職研究—」に展示されている作品について勉強してみよう。

### ちやくい 着衣を選ぶ だんせい ふくしよく 公家男性の服飾と決まりごと

今日はどんな服を着て出かけようかな・・・、天候を確認し、行先を考え、その日の気分に応じて、私たちは一番しっくりくる服を手に取ります。その時、外出先にふさわしくないために取りやめる服装はあっても、身分や立場によって着ることを禁じられる衣服はまずありません。現代を生きる私たちには、自分の好みにあった衣服を選ぶ楽しさや自由があります。

しかし、少し時を遡って江戸時代以前を考えると、衣服には、現代では想像できないようなさまざまな決まりごとがありました。公家なのか武家なのか、それとも町人なのかによって、着られる衣服の形状や、生地を飾る技法、さらには素材までもが定められていたのです。さらに、公家であっても、大臣以上の地位にまでのぼる家なのか、清涼殿への昇殿を許されているのか（これを殿上人と呼びました）、はたまた許されていないのか（地下と呼びました）によって、着用する衣服に違いがあったのです。

例えば、この絵を見てください（図1）。三人の公家男性が水辺で散策を楽しんでいる

ところです。公家の日常のお出かけの様子を描いているのですが、その服装に注目してみましょう。三人は、右から白、緑、茶色の衣服を着ているのですが、この衣服は袖付け部分が一部しか縫われていないようで、下に着ている内着が脇からちらりと見えています。そして、この衣服の



図1 銭形屏風（部分）六曲一隻 京都御所旧蔵 京都国立博物館

そでぐちには、いずれも袖括りの緒と呼ばれる紐が付けられています。このような特徴をもつものとして思い浮かぶのは、狩衣と呼ばれる衣服です。

しかし、よくよく見てみると、右端の人物の着衣のみ、前身頃と後身頃の脇が大きく開いているにもかかわらず、裾に別裂が付けられ、前後の身頃が裾だけつながっている様子が見て取れます。これは狩衣ではなく、小直衣と呼ばれる衣服です。小直衣は、近世には上皇や親王、または大臣や大将に任官した高位の公家のみが着用できる特別な衣服でした。このことから、右端に描かれるのは、身分が高い人物であることがうかがえます。



図2 小直衣 松重三菊丸文様繡取織 有栖川宮熾仁親王所用 一領 京都国立博物館



図3 小直衣 比曾久色菊丸文様縞 有栖川宮熾仁親王所用 一領 京都国立博物館

さらに、小直衣には、着用者の年齢によって厳格な決まりがありました。左図の小直衣をじっくり見比べてみてください（図2・図3）。衣服としての形はまったく一緒ですが、注意したいのは、生地に織り出された文様の大きさです。前身頃を例に挙げると、図2では、生地幅におおむね二つの丸文が置かれていますが、図3では一つだけになっています。これは、公家装束においては、小さい文様を密度高く配したものは若い人向き、大きい文様を間遠に散らしたものは老年向きという、約束事があるからです。さらに、袖括りの緒も、図2では幅広でしかも紫と白が交互にあらわれる組紐を用いていますが、図3では細くて白い紐

二本になっています。袖括りの緒にも、三十歳くらいまでは図2のような薄平を、年齢を重ねると図3のような左右縵を用いるとされていました。このように、江戸時代以前には、身分や年齢に応じて着用できる衣服はほぼ定まっていた。それは、衣服というものが外見を形づくるがゆえに、着ている人の社会的な地位を示すという役割を負っていたからです。

もし、自分の意思で衣服を選べるとしたら、当時の人々はどんなおしゃれを楽しみたかったのでしょうか。選べる自由って素敵ですね。

工芸室長 山川 暁